

『京話日報』から見る中華民国北京政府時期の北京旗人社会

阿 部 由美子

はじめに

本論文は中華民国北京政府時期の『京話日報』の記事を通じて、辛亥革命後の北京の旗人社会の実態を考察し、旗人を取りまく社会環境を明らかにすると同時に、彼らの主張、関心、自己意識などを明らかにすることを目的としている。旗人とは、清代の軍政・民政一体の組織である八旗に所属した人々である。八旗は八旗滿洲、八旗蒙古、八旗漢軍から成り、滿洲人を核としながらもモンゴル人、漢人、さらにはツングース系諸族や朝鮮人、ムスリムなど多様なエスニックグループを包摂する。その構成員は旗籍に属し、民籍に属する民人（一般漢人）とは区別された。清末民国時期に八旗に所属した人々を指す語としては、滿洲族・滿洲人・滿人・滿族・旗人・旗族などがありそれぞれニュアンスが異なるが、滿族は漢族との対比や、五族共和の一つであるなど、他の民族との対比が意識される場面で使用される傾向にあり、旗族は八旗の中の八旗滿洲、八旗蒙古、八旗漢軍が融合したことが意識される場合に使用される傾向があった（1）。『京話日

報』などの民国初期の新聞記事では他民族との対比ではなく単独で使用する場合には旗人・旗族の方が多数であり、滿洲人・滿人・滿族の使用は少数であるため、本論文では主に旗人を使用し、文脈に合わせて滿洲人・滿人・滿族を使用することとする。

従来、旗人・滿洲人研究は、清朝建国期から中期までに集中し近代以降、特に民国期以降の研究は相対的に手薄であった。近代以降の旗人・滿洲人が研究者の注目を集めてこなかった原因としては、革命史観の影響によって、清末の滿洲人は腐敗墮落したために革命側に打倒されたものであると認識されたため、また、モンゴル人やチベット人と異なり民族国家樹立のための独立運動を起こすこともなく、日常言語としての民族言語を失った滿洲人はすでに漢化したとみなされたためなどが考えられる（2）。民国期以降の研究としては、従来は史料制約もあり、刊行資料や公開された檔案に基づく土地制度史研究・経済史研究等が主流であった（3）。また、同時代の旗人の著作は限られているため、従来の研究ではほとんどが回想録や中華人民共和国成立以降に行われた社

会調査などを資料として歴史叙述がなされ、さらに近年では聞き取り調査によるオーラルヒストリーの歴史叙述も行われているが(4)、ある時点から過去を振り返る性質の回想資料や歴史叙述には、振り返った時点の政治状況や価値観に左右されてしまうという問題が常に存在していた。そこで筆者は、従来の研究に欠如していた、同時代の旗人の視点に基づいた資料を使用して旗人の生活環境や自己意識を解明することを旨とし、そのために注目したのが同時代の北京の白話報であった。なかでも『京話日報』は多くの旗人関連記事や旗人自身の投稿を掲載した、旗人を読者対象とした数少ないメディアであった。

『京話日報』は彭翼仲(一八六四—一九二二)によって一九〇四年に北京で創刊された、民族資本の日刊紙としては北京で最初の新聞で(外国資本も含めた日刊紙としては日本の『順天時報』が一九〇一年創刊で最も早い)、清末には立憲改革や社会改良運動を提唱し、北京の言論界で大きな影響力を持っていた。清末時期の『京話日報』に関しては多くの研究者が注目しているが(5)、一方で、一九二三年まで現存が確認されている『京話日報』の辛亥革命以降の部分に関してはほとんど研究がされていない。これは、一つには民国期以降、新聞メディアの林立により、『京話日報』が北京言論界で相対的に影響力を低下させたため、もう一つには、旗人や清朝遺臣などを読者層にもつ同紙の、清室擁護などに見られる保守的な論調が研究者の関心を集めなかったためであると考えられる。また、『京話日報』をはじめとする白話報

は、文学研究において京旗小説の発表の場として着目されているが(6)、記事自体を使用して旗人社会を考察した研究は見られない。

本論文では辛亥革命以降の『京話日報』の旗人関連記事を通じて中華民国北京政府時期の北京旗人社会の実態を解明し、彼らの主張、関心、自己意識などを明らかにするとともに、従来の民国史研究からは見過ごされていた北京という都市の一面面を照射することを意図している。本論を展開するにあたって注意しなければならないのが、北京政府時期の旗人社会を存続させた大前提となつた「優待条件」である。優待条件は辛亥革命時に清朝政府と中華民国政府の間で締結されたものであり、筆者はこの優待条件を、清室、皇族、滿蒙回藏各族が辛亥革命以降も清代以来の地位と社会構造を存続させることになつた基本的な枠組みであると位置づけている。優待条件は清室の地位の保全、八旗の生計を謀ることなどを規定しており、北京政府は優待条件を履行して、一九二四年一月に優待条件が一方的に修正されるまでは、財政が逼迫するなかでも清室優待費と旗餉の支給を継続していた。これは中華民国北京政府が、清朝から中華民国への政權交代の禪讓的性格(平和的政權移譲)を重視し、清朝の版図全てを継承する正統政權としての自身の地位を強調したためであり、孫文をはじめとする革命派が清朝を武力で打倒したことを自己の正統性の根拠としたのとは明確に異なっている(7)。しかし、北京政府は財政状況の悪化により、旗人の生計問題に対して有効な対策をとることができず、旗人の貧困

化が進んでいくが、旗人の困窮の様子は『京話日報』の記事からも見て取ることができる(8)。

本論文で使用する『京話日報』は全国図書館文獻縮微複製中心による影印本(二〇〇六年)全十二巻のうち辛亥革命以降の巻七―巻十二で、時期的には一九一四年三月一日―一九二三年四月五日までであるが、欠落も多い。欠落する期間については『群強報』、『順天時報』、『北京日報』などで補足する。以下、年月日のみの記事は『京話日報』からの引用である。

一 『京話日報』と旗人生計

1 首都北京が抱える旗人生計問題

優待条件のうち、滿蒙回藏各民族優待条件には「まず八旗の生計を謀り、それが成るまでは八旗の兵士の俸餉は従来通り支給する(先籌八旗生計、於未籌定之前、八旗兵弁俸餉、仍旧支放)」という規定があり、北京政府は八旗の貧困問題に対処する必要に迫られた。

清代においては、旗人は兵士になつて軍事を担うことを期待され、農業・商業などに従事することは禁止され、北京や駐防の各都市の滿城と呼ばれる区域に集住していた。そのため他の職業の技術・経験に乏しい旗人は転業が容易ではなく、民国以降に生活難から転業を迫られても、多くが人力車夫などの肉体労働者や物売りなどの零細商人になるよりほかなく、都市の貧困層になつていった(9)。八旗生計問題は北京を首都とする中華民国北京政府にとって非常に重い課題だつ

た。袁世凱が革命派の影響力の強い南京を避けて北京を首都としたことによつて、北京という都市が持つ構造的な問題をも北京政府が清朝から受け継いでいたからである。

北京の人口構成についてみると、一九一七年の北京城内の人口八万一千五百六人のうち漢族七〇・七五%、滿族二〇・二五%、回族三%、蒙古族一・二%、藏族千人以下とされてお(10)、城内の旗人人口は約二〇万人と推計される。そのうち旗人が多く居住していたのが北京の内城地区である。清代では旗人は北京の内城に居住し、漢人は内城での居住が禁じられ外城に居住していた。時代が下ると漢人と旗人の住み分けは崩れていくが、民国期以降も内城には多くの旗人が居住していた。また北京の西郊には藍靛廠の外火器營、円明園、香山の健銳營の外三營が設置され旗人が多数居住していた。民国時期の城内と西郊などを合わせた京旗の人口は約六〇万人とされるが(11)、これらの人口の多くが安定した職業や資産を持たない、旗餉に生計を頼つて生活していた人々だったと考えられる。政府にとつては、旗人の貧困化が進行すれば首都の治安を悪化させる要因にもなりかねず、そのため一九二四年までは旗餉の支給を継続したが、財政難のために旗人への授産などの根本的な貧困対策を行うことはできなかった。

2 旗餉の支給状況

旗人の最大の関心事は、旗餉の支給時期についてであり、『京話日報』は旗人に旗餉の支給時期を知らせる記事を定期

的に掲載している。次の記事は、前日に掲載した旗餉支給日を訂正するものである。

昨日旗餉の支給日を掲載したが、現在本社が調査したところによると、二十八日（本日）左翼に支給し、明後日（三十日）に右翼に支給するということである。（一朋『京話日報』記者顔一朋）注。このニュースは本来あまり大きな意味はないが、掲載したのは（巡警などで）北京の外で勤務していて旗餉を受給するみなさんは、その時になって休暇をとって旗餉を受領しに行くので、煩雑を憚らずに再び掲載した。しかし一昨日の記者の報告が間違っていたのは甚だ遺憾である。幸い本日正確な日にちを掲載した。そうでなければ人を騙してしまうところだった）（『再誌旗餉』昨紀旗餉日期 現経本社調査 二十八日（今天）開放左翼 後天（三十）開放右翼（一朋按此項新聞 本無多大意味 登出所為在外庇差（如巡警等）有餉的老哥們 臨期請假去閱錢糧 故不憚煩厭一再登載 但前日訪員報告錯誤 殊屬非是 幸今日登出准期 否則難避冤人之嫌）（一九一八年九月二十八日四九七号）（傍線は引用者）

旗餉を受領する旗人たちを、親しみを込めて「老哥們」と記しているこの記事は、『京話日報』の読者層が旗人たちであつたことを端的に示している。

八旗の給与体系は複雑で、旗兵の収入は毎月支給される旗餉のほか、馬乾や四季の兵米などから成つていた。馬乾や兵米は民国初年に段階的に停止していったが、旗餉の支給は一

九一九年までは毎月定期的に支給されていた。一九一八年の旗餉の支給時の様子について、『京話日報』の投稿文「嗚呼旗族」は次のように描写している。

毎月三十、三十一日の旗族の旗餉の支給日になると、街では男女の往来が絶えず、老若の貧者はボロボロの服を着て沿道で食料を買い求め、空腹を満たそうとしている。その惨状は筆舌に尽くしがたい。……今の旗族の貧しき成れの果てといったら、すでに息も絶え絶えである。（余毎見月逢三十三十一兩日 旗族餉期 街頭往来男女 絡繹不絕 老幼貧窶 鶉衣百結 沿路購食 以圖一飽 苦狀慘況 筆難罄述……今之旗族 末路窮途 已奄奄一息）（張秉樞來稿、一九一八年九月一日四二四八四号）

筆者が『京話日報』、『群強報』などで確認したところ、旗餉の支給日は一九一三年に陰曆から陽曆に切り替わつてからは当該月の一〇日、一九一四年二月に遅延が発生して以降は当該月の月末であつた。一九一九年三月以降は支給日が翌月にずれ込むようになり、最初、遅延は二、三日程度だったのが、徐々に一週間、十日、半月と拡大していった。一九一九年一二月分の旗餉が支給されたのは一個月近く遅れた一九二〇年一月二六日だった（12）。一九二〇年以降は定期的な支給が不可能になり、三月分が六月の旧曆端午節前（13）に支給された後は、安直戦争を経て、九月の中秋節前に支給され、その後支給は約四個月にわたって停止した（13）。旧曆の年末に困窮した旗人数千人が内城の值年旗衙門前に集結して

旗餉の支給を求める事態となり、政府はようやく旗餉の支給を再開した⁽¹⁴⁾。まさに一九五〇年代の北京市滿族調査で旗人の回想が述べる通り旧曆年末、端午節、中秋節などによりよく支給されるという状況であり、最終的には一九二四年に停止したとされている⁽¹⁵⁾。旗餉のみならず一九二〇年以降は教員や政府機関の職員給与未払いが頻発するようになっており、北京政府の財政状況が極めて悪化したことが窺える。一九一〇年代には旗餉が定期支給されていたが、それでも旗人の貧困化はすでに深刻で、特に一九一〇年代後半には旗人の自殺や救済を訴える記事が頻繁に紙面に掲載され、生活状況は極めて悪化していた。その原因を『京話日報』記事から探ってみよう。

3 旗餉の尅扣（ピンハネ）

一九一八年七月に正紅旗滿洲に支給された旗餉の内訳によると、受給者数は八四四一人、総額一万二五二八兩五厘、元に換算すると一万七四〇〇元である。旗兵の主力である馬甲は一五三四人で、一人あたり二兩一錢であった（清代の規定では馬甲は月三兩であるが、清末からすでに減額されている）。また、年少の兵士候補である養育兵は二二九五人で、一人当たり一兩五錢である。そして、孀婦、孤寡、孤女等の女性への支給が二八三〇人、総額四二七六元七分四厘であった⁽¹⁶⁾。つまり旗餉受給者数の約三三・五%、総額の二四・五%は身寄りのない女性などへの社会保障であった。また、政府が毎月京旗に支給している旗餉の総額は約四〇〇万元で

あった⁽¹⁷⁾。

両を基準としていた旗餉は、辦公費や学校運営費などが差し引かれてから元に換算されて旗人に支給されたが、その過程で官員の私的な尅扣（ピンハネ）も横行していた。『京話日報』では八旗の長年の弊害である尅扣について批判する記事を度々掲載している。尅扣の程度は八旗の二十四衙門（鑲黃旗、正黃旗、正白旗、正紅旗、鑲白旗、鑲紅旗、正藍旗、鑲藍旗それぞれの旗に滿洲、蒙古、漢軍がある）でそれぞれ異なるが、次の記事は異なる旗の馬甲の旗餉を比較している。

正紅旗漢軍の前月の旗餉は、都統色楞額の指示で馬甲に紙幣二元と銅元六吊四十文が支給されることになっていたが、參領毓璋は一人当たり六百四十文尅扣し、紙幣二元と銅元五吊四百文しか支給しなかった。また、鑲藍旗漢軍の前月の旗餉は、馬甲が紙幣二元と銅元三十七枚しか支給されず、鑲藍旗滿洲よりも二吊九百文少なかった。今月も旗餉の支給日になるが、旗兵の困窮はすでに極まっている。管轄の都統は鑲藍旗滿洲に学んでほしい。〔私扣兵餉〕正紅漢上旗餉 奉色都統諭 馬甲放票三元 銅元六吊零四十文 該旗參領毓璋 每份寬尅扣六百四十文 僅放鈔票三元 銅元五吊四百文 又鑲藍漢上旗餉 馬甲僅放鈔票二元 銅元三十七枚 比較鑲藍滿馬甲每份少放兩吊九百 本月旗餉又到 旗兵困苦已極 懇求該管都統 跟着廂藍滿字學吧）（一九一七年二月二七日二三三六号）

一九一七年一月の正紅旗漢軍の馬甲の旗餉は、本来紙幣二元と銅元六吊四〇文が支給されるはずだったが、尅扣されて実際に支給されていたのは紙幣二元と銅元五吊四〇〇文だった。同じ月の鑲藍旗漢軍の馬甲は紙幣二元と銅元三十七枚、一枚を銅錢一〇〇文とすると、三七〇〇文つまり三吊七〇〇文で、鑲藍旗滿洲はそれより二吊九〇〇文多い紙幣二元と六吊六〇〇文支給されていた。実は鑲藍旗滿洲は、以前は尅扣が横行していたのだが、一九一四年二月に旗人たちが陸軍部に都統秀吉、副都統文瑛、瑞啓らの不正を訴え(18)、都統、副都統が全員交代するという事態になり、その後旗務が整頓されたため他の旗よりも多く旗餉が支給されていたのだった。その後、正紅旗漢軍では都統色勒額が旗務の整頓に着手し、一九一八年三月の馬甲の支給額は紙幣二元と六吊七〇〇文まで増加したが、参領毓璋は辦公費を不当に多く徴収してそれを横領するなど不正を続けていたという(19)。鑲藍旗漢軍でも都統王九成が整頓に着手し、一九一八年七月の馬甲の旗餉は紙幣二元と五吊二四〇文まで増加したが、都統の尅扣禁止に反発した官員らが不当に辦公費の徴収を増やしたため、それでもまだ八〇〇文から一吊(一〇〇〇文)尅扣されていたという(20)。

旗餉の尅扣は禁止されており、『京話日報』でも度々旗餉の尅扣を批判する記事を掲載していたが、尅扣がなくなることはなかった。その背景には、八旗衙門の官員の俸給が低水準に抑えられていたということがある、各旗の参領、佐領や事務を取り仕切る官員たちは旗餉の尅扣によって利益を補填

しようとしていたと考えられる。『京話日報』は八旗官員が未払の俸給の支給を求めたという記事も多数掲載しており、一九一八年一月の記事によると、八旗世爵世職及び現任官員の俸給は去年秋に二割で支給されて以降支給されておらず、各旗で勤務する官員たちは食事にも事欠くありさだつたという(21)。彼らは毎月旗人に支給される旗餉のなから尅扣して利益を得ていたため、たとえ都統が尅扣を禁じても実務を取り仕切る八旗衙門の官員らが抵抗すれば尅扣の根絶は容易ではなかった。

4 紙幣兌換停止による影響

尅扣とともに旗人を苦しめていたものが、政府の紙幣兌換停止だった。一九一六年五月に政府が現銀の枯渇を防ぐために兌換を停止して以降、中国・交通兩銀行の紙幣価値が下落し、さらに金融混乱によって食料価格が急騰した(22)。ローズなどの先行研究では民国期の旗餉の支給貨幣について、銀貨と銅貨のみを指摘しているが(23)、実際には政府の現銀不足のために紙幣で支給されることの方が多く、旗人側は価値の下落しない現洋(現銀)での支給を求めている(24)。旗餉を紙幣で受給していた旗人にとって、紙幣価値の下落とインフレは生活を直撃するものだった。紙幣相場は〇・六、〇・五と下落していき、実際に使用する小額通貨の銅貨などに両替すると半分ほどの価値にしかならないという事態になっていた。

我が国の中国・交通兩行はなぜ兌換停止してしまったの

か。……ただ北京の小民を苦しめるだけである。一圓の紙幣を両替しても六角ちよつとにしかならない。相場がさらに下落したら二圓で一圓に換える(価値が半分になつてしまふ)ことになるかもしれない。さらに苦しいのが旗族の錢糧(旗餉の俗名)だ。尅扣される分を除けば、馬甲一人分で十数吊錢も差が出ることになり、雜合麵だけ食べても十分ではなく、河や井戸に身投げせずにいられようか。(我國中交同行 因何把兌現停止……只苦了北京的小民 空攬着一圓一圓紙幣 換到手也無非六角有零 市價再要往下溜 真許阿塊換一塊 再難受是旗族的錢糧 除去尅扣 一份馬甲 能差十來吊錢 淨吃雜合麵都不够 焉能不投河覓井)(一九一八年一月二十五日 二二六一号)

もともと旗餉の支給額は少なく一月の生活費にはとても足りない程度であつたが、尅扣によつて減少し、さらに紙幣価値下落とインフレの直撃を受けた旗人の旗餉は「十日もたないだろうに、あとの二十日はどうやって生活しているのか?」(25)という水準であつたという。ちなみに、当時薄給とされた巡警の月給が八元程度であつたが(26)、馬甲の一月の旗餉が二元と六吊程度では、それだけでも生活していけなかつただろう。

以上のように、北京政府は優待条件の規定に従い旗餉の支給を継続していたにも関わらず、旗人の生活状況は悪化の一途をたどつていた。旗人たちを苦しめていた二つの要因は、一つは八旗内部の尅扣であり、もう一つは政府の兌換停止政

策による紙幣価値の下落である。旗餉を紙幣で支給されていた旗人にとって、紙幣価値の下落により実質的な価値が半減する時期もあり、インフレによる食料価格の高騰とともに生活を直撃した。

二 投稿文にみる旗人の主張と漢人の旗人への視線

1 旗人の自殺をめぐる旗人の主張

前述のように、旗餉は一月の生活に十分な額ではなく、多くの旗人は低収入で不安定な肉体労働に従事したが、労働ができない老人や女性、病者などは、貧困と絶望から自殺する者も多かつた。『京話日報』は旗人の自殺記事を多数掲載している。その中の一つ、藍靛廠の老人、娘、息子の嫁の三人の入水自殺に対する投稿文から旗人の主張をみてみよう。

一九一八年六月に西郊の藍靛廠に住む正藍旗人の老人(延八、六十余歳)が貧困のため、娘と息子の嫁と三人で長春橋から長河に入水自殺した(一九一八年六月二十六日二四〇五号)。この自殺の報道に対して、老人一家の事情を知る転壑という人物が「記某旗人投河事」という文章を投稿した。この一家は延八、息子、息子の嫁、孫、孫娘、嫁いであら出戻つてきた娘という六人世帯で、民国以降収入がなくなり、老人と女性たちは息子と孫たちを生き延びさせるために死を選んだという。

嗚呼、三人は貧困のために死を選んでしまった。……今日の貧困は時勢に迫られたものであり、これを例えろと、工人が道具を奪われ、農民が田を奪われた状態であ

ら、漢回蔵の三族は誰に錢粮（旗餉）をもらいにいけばいいのか？」と答えている（28）。馬は、清室の優待は讓位の功績によるもので存続してもよいが、旗人が功績もないのに旗餉を受給し続けているのは五族共和の平等に反すると考えていた。彼はなぜか漢回蔵三族に蒙を入れていないのだが、定住民と遊牧民という生活形態の違いから蒙は除外し、定住民の漢回蔵と満は同一に扱われるべきと考えていたのかもしれない。当時は戦乱、不景氣、天災などで北京は失業者や難民で溢れ、社会全体が疲弊していた。そのような状況で、たとえ僅かでも旗餉を受給することのできる旗人に対する漢人の視線はより厳しいものになっていた。

一方、『京話日報』が掲載する旗人の投稿にも五族共和のもとでの平等に関するものがある。旗人の何志新は「旗族之将来」という投稿文で、「中華民國は五族共和の国である。約法上は一律平等であり差別はない。まことによいことだ。しかし名義上は平等でもその実際の程度は不十分である。私の言うことが信じられないのなら、試に旗族の近況を証拠としてお見せしましょう」（29）と述べ、旗人の置かれている劣悪な環境を嘆いている。旗人の立場では、旗人が存亡の危機にある現状は、五族共和の平等が実現されていない状態であると認識されていた。この五族共和のもとでの平等をめぐる旗人と漢人の認識のずれは、少数民族に対する優遇政策は平等かという、現代にも通じる議論を含んでいる。多数派から見れば少数民族に優遇政策が与えられるのは平等に反するが、少数派から見れば劣悪な環境にある少数派に優遇政策が与え

られないことが平等に反することになる。

社会全体が貧困化し失業者で溢れていた当時の北京では、旗人の立場は漢人から理解されず、自立できない存在という厳しい目で見られていた。そのようななかでも『京話日報』は旗人の投稿文などを通じて旗人の立場を代弁する数少ないメディアであった。

三 『京話日報』の記事から見てくるもの

一 八旗と清室、歩軍統領衙門

1 生活の基盤としての八旗

旗人の生活は北京政府時期も八旗を基盤としていた。優待条件の規定により、旗人の旗籍から民籍への変更が自由となり、民国初年には旗人の改籍や冠姓・改名申請が流行した（30）。しかし、改籍していたのは公務員など安定した職業に就いて八旗コミュニティから離脱しても生活に支障のない人々であり、大多数の旗人は依然として八旗に留まっていた。八旗は旗餉支給、就職機会提供、学校経営など様々な役割があった。次の記事は八旗の学校運営に関するものである。

正紅旗蒙古旗署附属高等小学校と国民学校は創設から数年、成績は非常によい。最近経費が不足しているため、校長常子受、教員倭繡卿、占詩農、白仁輔諸君は皆給料を半減して職務を尽くしている。正紅旗蒙古都統繼子寿（繼禄）はこのことを知ると、印務章京の岳敬之に

命じて同校の不足分の経費を報告させ、何とかして維持するようにさせている。〔維持学務〕正紅蒙旗署附属高等小学校 国民学校 開辦数載 成績甚佳 近因經費不足 校長常子受 教員倭蘊卿 占詩農 白仁輔諸君 均皆減薪半尽義務 事被管旗繼子寿都護所聞 已飭印務岳敬之 將該校所欠用款数目 開單呈閱 以便設法維持

(一九一六年二月二日一五七二號)

八旗の学校は、八旗衙門が経営し、当該旗の子弟たちに教育機会を提供するものであり、経費は旗餉から徴収されていた。清末には旗人の教育熱は盛んだったが、民国期には貧困から旗人子弟が学校に通わなくなったというが(31)、八旗の各学校では学費などを無料にし(32)、成績に応じて奨学金を出す(33)など、旗人子弟の学校離れを食い止めようとしていた。八旗の学校は、一九一〇年代までは経営が苦しいながらも職員(34)の努力によって十分機能していたが、一九二〇年代になると経費を集めることができなくなり、経営を続けられなくなっていた。

八旗各公立学校は前清時代には毎年学務処から経費五百両を支給されていた。民国成立後は京師学務局から班ごとに毎月十元の経費を支給されていたが、各校では経費の不足分は旗餉から工面していた。最近では旗餉の未払い分が三十か月以上にもなり、学務局からの経費も毎月支給されず、各旗の学校は困難が極点に達し、経営を続けられなくなっている。おそらく数か月後には各旗の学校はみな経営を停止してしまうだろう。現在までにす

に約十分の六の学校が経営を停止している。〔旗校勢將停辦〕八旗各公立小学校 在前清之時 每年由学務処各領經費銀五百兩 民国成立後 改由京師学務局 每月每班發給經費十元 各校不足之款 另由各該旗於旗餉款項下 酌予撥給 近年以来 旗餉積欠三十余月 学務局之款 亦不能按月發給 所以各旗所立学校 困難已極 幾將不能支持 恐数月之後 各旗校勢將一律停辦 現在已經停辦者 約有十分之六(一九二三年二月二日三九九七号)

この記事からは、旗餉の他には所有する不動産の賃貸収入などしか財政基盤のない八旗が、一九二〇年代に旗餉が滞るようになり急速に機能を低下させていった姿が窺える。

2 八旗と清室、歩軍統領衙門の關係

八旗の重要な役割の一つに、就業機会の提供があった。旗人にとって重要な雇用機関だったのは清室と歩軍統領衙門である。清室と歩軍統領衙門(提署)は八旗と直接的な統属關係にはないが、八旗を人材供給源としており八旗と密接な關係にあった。次の記事は歩軍統領衙門の兵士の選抜に関するものである。

右翼司務公所は歩軍統領衙門の江統領(江朝宗)の命を受けて、五月五日に衙門で営翼の兵を選抜する。各旗が予め客送していた正黄、正紅、鑲紅、鑲藍の滿蒙漢の役職に就いていない者たちは五月二日午前七時に北溝治の第八中隊兵場で試験に備え、三日午前六時には引き続き

兵場で検査に備えるように。以上通知する。(「営翼挑缺」右翼司務公所現奉提署江統領令 定於五月五号在提署挑補官翼兵缺 所有前經各旗咨送之正黃正紅鑲紅鑲藍滿蒙漢閑散人等 均定於五月二号早七時 在北溝沿第八中隊兵場預備考試 於三号早六時 仍在兵場預備驗看 該所已通知各)(『群強報』一九一三年四月二八日)

また、次の記事は清室の職員のパストに関するものである。

清室の鑾輿衛衙門は正儀尉の欠員があれば、従来は各旗から官品にあった人員を送らせその中から選抜していた。現在該機関には正儀尉の欠員が七つあるが、某冠軍は、従来の選抜方法によらずに、本機関の官員の子や甥からの選抜に改めるように那王(那彥圖)に極力働きかけている。(「運動改革」清室鑾輿衛衙門 遇有正儀尉官缺 向由各旗咨取对品人員揀補 現聞該処縣有正儀尉七缺 有某冠軍打算不按旧章揀選 改由本署官員子姪選補 刻正竭力運動那王)(一九一八年九月二二日二四九一号)

歩軍統領衙門も清室も欠員が出ると八旗から送られてきた人員のなかから選抜していた。ただ、清室の職員の間ではこの慣例を改めて職員の親族から選ぶようにしてほしいと管理鑾輿衛事務大臣のハルハ親王那彥圖(チャント)に働きかけており、清室職員の生活が困窮し、パストの確保に必死になつていたことが窺える。

3 旗人の就業の場としての清室

清室は旗人にとつて最大の雇用機関である。清室の被雇用者は膨大で、内務府と附属の宗人府、鑾輿衛、御前大臣処、東西陵などの機関の官員や侍衛、蘇拉、太監、宮女など多岐にわたつていた(34)。内務府大臣世統が大總統徐世昌に清室の窮状を訴えた書簡によると、優待費から給与を支給されて生活している職員及びその家族は数十万人に上るといふ(35)。「京話日報」は清室の報道に力を入れ、特に清室専門の取材記者を配置し、宣統帝及び清室関係者の動向、清宮への謁見者などの情報を詳細に報道している。また、八旗の旗餉と同様に、清室職員の給与の支給に関する記事も多数あり、重要な関心事であつた。優待費の遅延により、清室職員の給与支給が滞り、職員が内務府大臣世統に直訴したという記事もしばしば見られる。次にあげるのは一九一七年一月に侍衛たちが内務府大臣世統に給与の支払いを求めて直訴したという記事である。

侍衛が給与支払いを要求しているというのは前報で報じたが、十一日上午十一時に侍衛常子元、德輔臣、世義泉等は内廷神武門で世統に謁見し嘆願書を手渡した。この時中堂(内務府大臣世統)は肩輿に乗つていたが、輿を下させて嘆願書を受け取り、侍衛に言つた。「現在清室の財政は逼迫しており、財政部は毎月僅かに經費十萬両しか清室に支給しておらず、これは常年經費四百萬兩の三分の一にしか当たらず、各処の經費はみな規定數通りに出すことができない」。各侍衛が申し上げるには、「私

たちの困窮がすでに頂点に達していることは、中堂もご存じのほうです、民国が経費を支給するかどうかは私たちには関係ありません、ただ中堂のお慈悲を請い何とかしていただきたいのです」。中堂は言った。「必ずお前たちのために方法を講じて急いでなんとかしよう」。(「再誌要俸」侍衛要求放俸 已誌前報 現聞十一日上午十一時 侍衛常子元 德輔臣 世義泉等進内廷神武門謁見世中堂遞稟児 彼時中堂乘坐肩輿 即令落平 將稟帖接取 向各侍衛說 現在清室庫款支絀 財政部每月僅交經費十萬兩 常年經費四百萬兩 約在三分之一 以致各等處辦公經費 均不能如數發給 各侍衛稟道 職等困苦情形 現在已到極点 中堂是知道的 民国交款如何 職等概不干涉 惟求中堂施恩 設法維持 中堂說我必給你們想法子趕緊辦)(一九一七年二月一四日三二四号)

一九一七年は府院の争いや張勳復辟が起り、政府は混亂のなかにあり、優待費の支給は滞っていた。復辟後の清室への批判的な世論もあり、優待条件の廃止や優待費の減額も議論されたが、政府は復辟と清室は無関係という清室の主張を認めて優待条件の修正は行わず、優待費の支給を再開している。

優待条件の擁護も『京話日報』の特徴の一つである。一九二三年三月には優待条件存続を訴える民間団体「国信維持会」の広告を掲載しているが、同団体の連絡先も『京話日報』社になっており、『京話日報』と近い人々によって組織されたと考えられる。同団体は優待条件を「国家の信用」と

結びつけて存続を訴え、憲法に記載するように求めている。

民国の成立に、最も功績があるのは誰か。我が国民同胞が良心に従って言うならば清室の遜位をあげるべきだろう。もし当時清室が政權を独占し、孤注一擲で漢陽を攻めて龜山を落としていれば停戦はなされず、民国の成立も容易ではなかっただろう。ただ隆裕太后が民の苦しみを忍びないと思い、毅然として詔書を下し政權を譲り、こうして共和の民国が出現した。国人は感激のあまり、功に報いるために優待条件を定め、中外に宣布した。これらの条件は民国が存続する間は承認されなくてはならないものである。『論語』(「顔淵」)に云う、古より皆死あり、民信なくんば立たずと。国としてどうして信が無くていられようか。思いがけないことに最近優待条件の取消を提議するものがあるが、これは国家の信用を損なうものであり、そうすれば五族共和は空言になり、誰も信用しなくなるだろう。我々は人心が動揺し、國際的な信用を失うことを恐れ、国信維持会を発足させ、清皇室条件を憲法に記載し、国の信用と基礎を固められるように、いつ何人も改修できないようにすることを主張する。もし良心により賛同する者があれば、ともに活動できれば幸いであるので本社に連絡してほしい。(「發起国信維持会啓事」民国成立。首功究竟為誰。想我國民同胞憑良心說一句總要推重清室至遜位。假如當時清室把持政權。孤注一擲當日攻下漢陽。設使得了龜山。仍不停戰。則民國成立、也不能這樣容易。只因隆裕太后。不忍生靈

塗炭。毅然下詔。讓出政權。這纔有共和國出現。國人感激之余。為酬功起見。始定出優待清室條件。宣布中外。此等條件。民國存立一天。都是要承認一天的。語云。自古皆有死。民無信不立。一國之大。豈能無信麼。不料近來有提議取消優待條件之說。這算不維持國家信用的辦法。那麼五族共和一句空話。誰人還肯信呢。同人等恐搖動人心。致失國際信用。因有國信維持會之發起。主張將優待清室條件列入憲法。無論何人何時。不得議及修改。以堅國信而固邦基。如有良心上之主張贊成者。請投函本報社。以便公同進行是幸。

發起人 姚錫光 劉英 延齡 許學源 李志愷 曾樹基

董小儒

贊成人 吳惟聰 劉文琳 陳銓 趙銓麟 趙漢民 李岷揚 于季龍 札露霖

(一九二三年三月一三四〇二〇号)

4 北京の治安と歩軍統領衙門

清室と並んで旗人にとって重要な就業の場だったのが、歩軍統領衙門である。前述のように歩軍統領は八旗と密接な関係にあり、歩軍統領の江朝宗、李長泰、王懷慶などは管理火器營事務など八旗関連の職を兼任していた。歩軍統領衙門の兵士は一万二千人で(36)、事務員や雑用係などを合わせれば更に大きな雇用があっただろう。

清初に創設され八旗と縁から成る歩軍統領衙門は、城門の管理、犯罪者の逮捕、街道の警備など治安維持を担当する

ほか、困窮者のための粥配給所(粥廠)を運営したり、種痘を実施するなど都市行政も担っており、『京話日報』にも歩軍統領衙門に関する報道は多い。歩軍統領衙門は、二〇世紀初頭の警察の創設以降も、警察と併存して北京の治安維持を担当し、歩軍統領衙門と警察はともに旗人が多く採用されていたという。近代警察の創設については多くの研究者が注目しているが、民国期以降の歩軍統領衙門についてはほとんど研究されていない。だが実際は、歩軍統領衙門は北京の都市機能を考えるうえで、警察と同等かそれ以上の重要性を持っていた。

歩軍統領衙門は清代以来の構造をもち、警察とも機能が重複することから、警察の創設以降しばしば廃止論や改編論がおきていた。『提署改組消息』(一九二三年二月一日三九九六号)によると、國務總理張紹曾は、「歩軍統領衙門は前清時代の古くからある機関で、民国の体制には合っていない」として、当該機関を京師衛戍總督署に改組する計画をたてていたという。一方、『順天時報』は歩軍統領衙門の廃止論に対して、「民国成立から十一年、北京の治安が守られてきたのは歩軍統領衙門の功績である」、「警察の力は薄弱である」、「地方の軍隊と違い、歩軍統領衙門は土着の兵士であり、商民に信頼されている」、「歩軍統領衙門が廃止されれば職を失った兵士の一家の老若は生活していけない。彼らは皆旗族であり、餓えと寒さのために亡国の恨みを思わずにはいられないだろう」と述べ、廃止に反対している(37)。また、『京話日報』も歩軍統領衙門の游緝隊の兵士について、「游緝隊

の軍紀は日頃から厳格である。一般の隊兵は皆北京の住民であるため、軍律を守らない者はいない。もし給料の未払いをなくし、真剣に訓練すれば、必ず模範的な軍隊になるだろう」と評している(38)。当時、地方の軍隊が北京で住民に乱暴したり商店に金銭を要求したりするなどの事件が頻発しており、これらの記事からは、地方の軍紀の乱れた軍隊への反発と、それらと違い、北京の住民で構成されていたために住民と良好な関係だった歩軍統領衙門の治安維持機能への期待を窺うことができる。

5 兵士としての旗人

清末以降、旧来の八旗軍では内憂外患に対処できず、八旗は軍事組織としての機能を低下させ、旗兵は預備戦力的な位置づけになっていった(39)。また旗人は腐敗墮落した無能な存在であるという先入観と、民国以降、多くの旗人が冠姓・改名したため旗人かどうか一見して判別できなくなったために、旗人の兵士としての性質は忘れ去られていった。だが、歩軍統領衙門の兵士として北京の治安を維持していたのは旗人たちであり、さらに警察や新式陸軍が創設される過程でも、多くの旗人が近代軍事機構へ編入されている。清末に創設された新式陸軍のうち、第一鎮(後の第一師)と禁衛軍(後の第十六師)は旗人を中心に編成された精銳部隊であり、これらの軍は張家口に駐屯して対モンゴル戦に動員されたり、南京に駐屯して第二革命を鎮圧したりしている。一九一三年七月の第二革命勃発に際して、政府は一度解散させてい

た第一師の旗人を再び召集した。

口北に駐屯していた京旗陸軍第一師の軍隊は、先に陸軍部に解散させられ続々と北京に帰つてきていたが、最近陸軍部は、解散させた兵士たちの多くが一昨年に武漢で最前線に立つた健児で馮国璋軍統に従い何度も勝利してきた勇猛な兵士であり、現在用兵に際し、この精兵なくして叛党を鎮圧できないとして、すでに各旗に連絡して該隊の兵士を調査して陸軍部に送り派遣に備えさせているとのこと。「査核退兵」駐紮口北之京旗陸軍第一師軍隊 前經陸軍部解散隊伍 業已相繼回京 頃聞陸軍部以該散軍多係前歲武漢前敵之健児 隨馮国璋軍統屢戰屢勝 頗為勇猛 現值用兵之際 非有此精兵 不能消弭叛黨 聞已行文各旗 詳細查該隊伍之士 咨行陸軍部聽候調遣」(『群強報』一九一三年七月二七日)

この記事からは旗人の、墮落して兵士としては無能な存在としてではなく、最前線に立つ精兵としての姿が見えてくるだろう。旗人自身も自分たちの本分は兵士であるという意識を民国以降も持ち続けていた。一九一三年に管理值年旗事務都統睿親王魁斌が政府に代呈した八旗官兵たちの陸軍への志願文では以下のように述べている。

我々滿族は同じく国民であり、久しく軍籍にあり、国家を前提とし防衛に尽力することを天職としてきました。国家の危機(外モンゴル独立と第二革命を指す)の知らせを聞くたびに悲しみ憤らないものはありません。国民として幸福を享受する者は国家の分子であり、この時局

を座視することはできません。国に報い敵を迎え撃ちたいと思います〔我滿族同係國民、久隸軍籍尤當以國家為前提竭力捍衛藉盡天職、是以每聞警報伝来、無不痛心疾首、既同享國民幸福即為國家分子、當此時局斷難坐視、報効情殷枕戈以待〕(40)

この文には、彼らの兵士としての自負と國民の一員として認められたいという願望が表れている。また生活苦のために兵士になつて安定した収入を得たいという事情もあつただろう。戦死する旗人も多く、一九一八年六月の記事によると、戦死した旗人一〇六人に郵金六二四五元が支給されている(41)。旗人には、自分たちの本分が兵士であるという意識と軍事を担つて國の防衛をしてきたという自負があつたため、漢人に働かずに食べているだけの存在と批判されることは堪えがたいことだった。現代の滿族の学者金啓孫(一九一八—二〇〇四)は、以下のように述べて漢人社会で批判に晒されてきた旗餉で生活する旗人の立場を代弁している。「清代には各民族は職業を分業していたのであり、旗人は徵兵制、漢人は募兵制で、旗人の負担が一番重かつた。子供は生まれると「養育兵」になり、成人すると祖國を守るために戦場で戦い、多くが戦死していった。彼らが大きな犠牲を払ったからこそ國內の平和と社會の秩序が守られ、農、工、商、士はそれぞれの仕事ができただのである」、「旗人が軍餉で生活することを搾取というのは完全な民族偏見である」(42)。

『京話日報』の記事は、北京政府時代の北京の旗人社会の実態を生き生きと描いている。そのなかで注目すべきは、旗

人の生活は依然として八旗を基盤としていたということ、そして清室及び歩軍統領衙門が旗人の生活と密接な關係を持っていたということである。従来、前時代の遺物とみなされ注目されてこなかった八旗、清室、歩軍統領衙門などは同時期の北京という都市を再考するうえでも重要なファクターである。また、旗人は兵士としては無能だという先入観によつて旗人の軍事的役割は見過されてきたが、実際には新式軍隊や警察などに多くの旗人が編入されており、軍事史を再考するうえでも旗人という視点は重要な手がかりを与えてくれるだろう。

おわりに

『京話日報』は旗人を主な読者層とする白話報であり、旗人関連記事や旗人からの投稿文を掲載し、彼らの主張を代弁する数少ないメディアだった。『京話日報』の記事を通じて旗人の生活を分析すると、政府が優待条件の規定に従い旗餉の支給を継続していたにもかかわらず旗人の困窮が進行していた原因を理解することができると、旗人を苦しめていたものは、一つは八旗内部の尅扣であり、もう一つは政府の金融政策のあおりを受けた紙幣価値の暴落であり、旗餉を受け取つても価値が半減するという事態になっていた。旗人は清代には兵士となることを期待され他業種に就くことを禁止され、旗人自身も自分たちの本分は兵士であるという自負を持っていたが、その固定性ゆえに他業種の経験・技能が不足し、転業して安定した職を得ることは非常に困難だった。その結

果、民国以降に転業を迫られた時に、多くが低収入の肉体労働者などにならざるを得ず、都市の低所得者層を形成した。旗人の立場では、「工人が道具を奪われ、農民が田を奪われた状態」であるが、漢人からは、自立できない無能な存在として見られ、理解されないというジレンマを抱えていた。一方で、一部の旗人は軍隊や警察に編入され、北京や地方の治安維持を担ったが、冠姓・改名により一見して旗人と判別できなくなつたため、これまで研究者からは注目されてこなかった。

旗人は辛亥革命以降も八旗を生活基盤とし、八旗衙門に管轄され、清室や歩軍統領衙門を就業の場とするなど、清代以来の社会構造を維持し、清代との連続性が顕著であつた。政府は優待条件を履行し、旗餉や清室優待費を支給していたが、一九二〇年以降は政情不安や軍閥内戦によつて北京は難民の流入、失業者の増加などが深刻化する。政府の財政はさらに悪化し、公務員や教員、軍警関係の給与すら滞るようになり、旗餉や清室優待費の定期的な支給は不可能になつていった。社会全体の貧困が深刻化したことによつて、社会は余裕を失い、旗人や清室への視線はより厳しいものになつていった。一九二四年一月の馮玉祥による優待条件の一方的修正は、実質的には旗人社会の切り捨てであつた。清室の紫禁城退去や歩軍統領衙門の廃止によつて、大量の旗人が失業し、街は困窮者で溢れたという⁽⁴³⁾。旗餉も一九二四年以降停止し、八旗は以降も存続はするものの財源を失い機能を停止させていった。優待条件修正に対して、満族同進会、蒙古

聯合会などは五族共和が損なわれたと批判しているが⁽⁴⁴⁾、彼らの立場では、優待条件は民国の「国家の信用」に直結しており、優待条件が一方的に修正されたことは、それが損なわれたのと等しく、民国への不信感を募らせることになる。

『京話日報』が映し出した清末民初の北京社会は、立憲改革と社会改良に昂揚していた清末から、清代との連続性が強かつた一九一〇年代、危機を迎えようとしていた一九二〇年代初頭であり、本論文が取り上げた一九一〇年代から一九二〇年代初頭は八旗が機能していた最後の時代であつた。旗人の貧困化により旗人を主な読者層とする『京話日報』の経営が悪化したことは想像に難くなく、『京話日報』が一九二三年に停刊していることは、八旗の歴史が終焉に向かつていたことを象徴している。一九二四年の北京政変で、旗人社会は清代以来の社会構造を大変動させる衝撃を受け、一九二八年に北京政府が滅亡すると、八旗もその歴史を終える。八旗という拠り所を失つた旗人たちは、過去に八旗に所属していたという記憶とアイデンティティを頼りに満洲族を構成していくが、八旗崩壊後の満洲族アイデンティティの確立については、今後の課題としたい。

注

(1) 劉小萌は、旗族は清末に出現し民国初期に流行した呼称であるが、八旗が消滅して以降は見られなくなるため、旗族の呼称の誕生をもつて現代の満族の誕生とすることはできないとしている(劉小萌『清代北京旗

人社会』中国社会科学出版社、二〇〇八年、八四二頁。

(2) 近年では満漢關係等を手掛かりに清末民国時期の旗人・滿族を分析する研究が現れている。Edward J. M. Rhoads, *Manchus & Han: Ethnic Relations and Political Power in Late Qing and Early Republican China, 1861-1928*, University of Washington Press, 2000. 戴迎華『清末民初旗民生存狀態研究』人民出版社、二〇一〇年。常書紅『辛亥革命前後の滿族研究——以滿漢關係為中心』社会科学文献出版社二〇一一年。

(3) 代表的な研究としては、八旗王公の旗地所有と解体を分析した楊学琛、周遠廉『清代八旗王公貴族興衰史』(遼寧人民出版社、一九八六年)、旗地の解体と新興地主層の台頭を明らかにした江夏由樹の研究(Yoshiki Enatsu, *Banner Legacy: The Rise of the Fongtium Local Elite at the End of the Qing*, Center for Chinese Studies, The University of Michigan, 2004)等がある。

(4) 旗人への聞き取り調査に基づきオーラルヒストリーの歴史叙述を試みた代表的な研究として定宜庄『最後の記憶——十六位旗人婦女的口述歴史』中国廣播電視出版社、一九九九年等がある。

(5) 『京話日報』研究の代表的なものには以下がある。楊早『啓蒙的新形態——晚清啓蒙運動中的『京話日報』』『中国文学研究』二〇〇三年三期。賈艷麗『京話日報』与二〇世紀初年国民捐運動』『清史研究』二〇〇

六年八月第三期。王鴻利『京話日報』的甲辰(一九〇四)之困』『北京社会科学』二〇〇九年二期。同『清末北京下層啓蒙運動初論——『京話日報』的興起』『滿学論叢』第一輯、遼寧民族出版社、二〇一一年。また、彭翼仲については姜緯堂、彭望寧『維新志士愛國報人彭翼仲』大連出版社、一九九六年を参照。

(6) 劉大先『清末民初北京報紙与京旗小説的格局』『滿族研究』二〇〇八年二期。

(7) 拙稿『中華民国北京政府時期清室、宗室、八旗与民国政府的關係』、中国社会科学院近代史研究所政治史研究室編『清代滿漢關係研究』社会科学出版社、二〇一一年。

(8) 『京話日報』では「紹介慈善」として困窮者の情報を掲載し、それを見た慈善家から寄付された金銭や食料、衣服などを困窮者に分配するという活動を行っていたが、そのなかには救済を求める旗人からの投稿が多数見られる。例えば一九一六年一月二七日一五六三号では「孀旗王張氏 四十九歲殘廢無双足四口凍餓」、「崇山 前充庫役現無事五口侯餓」、「色克圖 前清度支部郎中被裁夫婦二人家私売尽每日侯餓」、「旗婦福李氏 凍餓不能行動」、「榮陞 前清世職四口凍餓」、「海亮 護軍年老被裁無衣食」、「旗人德恒額 五口無餉侯餓」等が掲載されている。新聞による困窮者情報の掲載と寄付の募集は『順天時報』など他紙にも見られるが、『京話日報』では困窮者の掲載人数が非常に多く、

貧困対策に力を入れていた点に特徴がある。

- (9) 当時の北京の人力車夫には多くの旗人がいたという。北京の人力車夫については、David Strand, *Rickshaw Beijing: City People and Politics in the 1920s*, University of California Press, 1989 を参照。

- (10) Sidney D. Gamble, *Peking: A Social Survey*, George H. Doran Company, 1921.

- (11) 民族問題五種叢書遼寧省編輯委員會編『滿族社会歴史調査』遼寧人民出版社、一九八五年、八五頁。同書は『清史稿』兵志一が挙げる清末の職員六六八〇人、兵丁十二万三〇九人という数字から、一世帯五人計算で六十三余人と推定し、民国期の旗人が提出した請願書でも兵士家族合わせた人口を六〇余万としていることから京旗の人口を六〇余万人と推定している。

- (12) 『群強報』一九二〇年一月二十五日。

- (13) 『群強報』一九二〇年六月十八日、九月二十四日。

- (14) 「旗人擬向公府索餉 男女聚衆數千人」、『順天時報』一九二一年一月二日。

- (15) 前掲『滿族社会歴史調査』、八九頁。

- (16) 「北京滿洲（正紅旗）民國七年七月份弁兵等餉銀津貼表」、前掲『滿族社会歴史調査』、二四頁。

- (17) 「良心何在」一九一八年二月一九日、二八〇号。

- (18) 「都統被控」、『群強報』一九一四年三月一日。

- (19) 「整頓旗務」一九一八年四月四日、二三二四号。『尅扣兵餉』一九一八年四月五日、二三二五号。

- (20) 「旗弊難除」一九一八年八月六日、二四四五号。『三誌扣餉』一九一八年九月二九日、二四九八号。

- (21) 「上書要俸」一九一八年一月二八日、二五五六号。

- (22) 味岡徹「袁世凱政府の財政破綻と兌換停止令」、増淵龍夫先生退官記念論集刊行会『中国史における社会と民衆—増淵龍夫先生退官記念論集』、汲古書院、一九八三年所収。

- (23) Rhoads, *op. cit.*, pp. 265-268.

- (24) 「要求搭現 八旗各部統等 因中交鈔價格跌落 日前特在值年旗會議 要求政府將八旗兵丁等月餉 搭放現洋五成 聞已上書國務院了」、一九一八年九月二二日、二四九一号。

- (25) 楊曼青「替窩窩頭請命」、『群強報』一九一九年二月二七日、二六四七号。

- (26) 何志新「旗族之將來」……今既因於生計 曷暇遠圖 加以畢業中學者 亦不過充八元之警士而已 誰又肯擲若許金錢光陰以從事哉……一九一八年一月二七日、二五五五号。唐子安「生活程度与能力」……當巡警的 每月連加薪閏上十元八元的 還搭三成鈔票 真有八口之家 該處當怎麼活着呀……『群強報』一九一九年四月一六日。

- (27) なお、吳粹箴自身も現状への絶望から、一九一八年一月に『京話日報』経営陣の一人梁濟（哲学者梁漱溟の父）の自殺の後を追ひ積水潭に身を投げて自殺している。また、それに先立つ一九一八年五月には『京

話日報』創刊者の彭翼仲が自殺未遂を起こしている。相次いだ『京話日報』幹部の自殺・自殺未遂については、韓華「梁済自沈与民初信仰危機」『清史研究』二〇〇六年第一期。楊早『京話日報』的啓蒙困境——以梁済等人自殺为中心『中国圖書評論』二〇〇九年八期等を参照。

(28) 東郊馬笠農投稿「旗族今昔感言」、『群強報』一九二〇年六月一四、一五号。

(29) 何志新来稿「旗族之将来」一九一八年二月二七号二五五号。

(30) ただし、民籍に変更する改籍と、生活上の不便から漢人風の姓を名乗る冠姓、漢人風の名前への改名とは同一ではなく、冠姓・改名のみで改籍しない例も多い。

(31) 何志新来稿「旗族之将来」一九一八年二月二七号二五五号。

(32) 正白滿洲公立学校では学費のみならず、書籍、体操着など一切の費用を無料にしている。「学校招生 齊内竹竿巷 正白滿洲公立学校 拡充学額 添招高等班三十名 初等班三十名 書籍学費操衣 一概不取分文」三月三十一日 停止報名 四月一日在本学校考試、一九一八年三月一八日二三〇七号。

(33) 「奨励学生 廂白旗滿洲 瑞裕如都護(瑞豐) 日前赴該旗附設国民学校 親自考驗学生成績優劣 分為四級 計獎金一元五角 一元 五角 三角不等 勉以專

心向学力向進歩」一九一八年七月二九日二四三七号。
(34) 清室の被雇用者は旗人が多いが、旗人のみではない。例えば太監は旗人ではない。

(35) 「致徐大總統公函」一九二〇年三月、「内務府公函底稿」、「内務府檔案文獻匯編」全國圖書館文獻縮微複製中心、二〇〇四年、三六一五頁。

(36) 「經費難減」、「群強報」一九一九年八月二日。

(37) 「裁提署之伝聞」、「順天時報」一九二三年一月三日。

(38) 「游緝隊將改編」一九二三年二月三日三九九八号。

(39) 民国時代でも八旗旗營は陸軍部管轄の軍隊であり、有事の際には動員されていたようだ。安直戦争時には歩軍統領配下の火器營の旗兵が北京の城門警備に動員されている。「城上撤兵 提署王統領 昨令所有各門城上加派之外火器營官兵 着即撤回 仍歸原營駐守 關係因地面安靜 故皆撤去 恢復現狀」(『群強報』一九二〇年八月二日)。また、旗兵の選拔基準は、清代には国語騎射といわれるように滿洲語能力と弓矢による射撃だったが、民国時期は空氣銃による射撃となっており、裝備の近代化がみられる。「大撥兵缺 正紅漢副都統希公(希璋) 五日辰刻進署 在箭厅挑補兵缺 計領催十二缺 馬甲二十九缺 教爾布十五缺 養育兵二十二缺 均照部章擬補公挑之缺 以汽槍中靶多寡為定 甚屬公允、一九一八年六月七日二三八七号。

- (40) 「管理值年旗事務都統和碩睿親王魁斌等呈大總統據情代請揀選旗營兵丁隨同陸軍出征恭候批示祇遵文並批」、『政府公報』一九一三年九月二日四七七號。
- (41) 「傳領卹金」一九一八年六月二日三九二號。
- (42) 金啓孫『金啓孫談北京的滿族』中華書局、二〇〇九年、八頁。
- (43) 「遍滿京華之貧民 忽增一萬三千餘人」、『北京日報』一九二四年一月八日。
- (44) 「滿蒙協進會等致張作霖呈文」一九二四年二月、中國第一歷史檔案館「溥儀出宮後圖謀恢復優待條件史料」、『歷史檔案』二〇〇〇年一期。「蒙人反對修改清室優待條件」、『大公報』（長沙）一九二四年二月三日。